

きょうの紙面

レスリング世界選手権の男子フリースタイル65キロ級で、19歳10カ月の乙黒拓斗が日本男子史上最年少で優勝＝19面

乙黒拓が最年少V



榎戸直紀撮影

トルコ大統領「計画的殺人」 3

風疹 米が日本渡航自粛勧告 24

中国人孤児 育てた日本兵 25

医学部入試不正／英国のEU離脱 社説5

がん免疫薬 個人差解明へ

名大と米医薬品大手が、がん免疫薬の効果の個人差を調べる研究を開始。細胞や遺伝子レベルで解明し、個人に合った薬を特定する＝24面

裁判官懲戒「？」残る審理

特報

「不適切ツイート」で懲戒された裁判官の分限裁判。最高裁の決定は裁判官を萎縮させかねない＝11面

老老介護の現実 娘が撮った



認知症の87歳の母と介護する95歳の父。映画監督の一人娘が、遠距離介護しながら家族を撮影した＝16面

詰め込まず寄り添う塾



学習障害がある児童が通う塾がある。約束事は宿題をするだけ。伸び伸び過ごし、生きる力を養う＝17面

国際
株・商況
小説

4
89
16

スポーツ
番組紹介
囲碁・将棋

1819
21
21

口を出さず自発性育む

やることに口を出さず、子どもに寄り添う学習塾が愛知県岩倉市にある。最低限のやることは学校の宿題だけで、あとは自由。学習障害(LD)などがあり、学校生活になじみにくい小学生三人が通っているのはのびのびと過ごし、ゆっくり成長している。(出口有紀)



「いやだー」。一番乗りで塾にやってきたのは近隣の同県稲沢市に住む小学四年生の湯脇万葉さん(九)。いすの上で猫のように小さく丸まる。しばらくいねていたが、母佐代さん(四)が絵本の読み聞かせを始めると、佐代さんのひざの間に入り込み、絵本に集中した。

「いつも最初は嫌がるの」。児童文学研究者で、この「元

詰め込まない学習塾

「上」
気のする学習塾』を主宰する伊藤順子さん(五)がほほ笑む。絵本や漫画など約二万冊を置いて二〇〇九年に開設した私設図書館で、一五年秋に元県職員の夫俊彦さん(六)と始めた。学習塾といっても、目指すのは子どもたちが自発的に学びたいことに取り組む姿勢を身に付けること。「勉強しなさい」とは一切、言わない。



支学級では習っていないし、通常学級の友だちと離れてしまつ。これでよかったのか」名古屋市の航空機メーカーの元技術者で、現在は故郷の大分県で猟師をする蔵本晴之さん(六)は、テレビ電話を使

「基地」で本を読む子どもたちを見守る伊藤順子さん(左奥)と俊彦さん(右端)＝愛知県岩倉市で

って子どもたちに主に計算を教える。特別授業として、象形文字を見せて、その文字からどの漢字が成り立ったのかを考えさせると、万葉さんは次々と当てて、蔵本さんや順子さんを驚かせた。

塾に來た当初は、平仮名の「の」と「ね」の見分けが付かず、音読するときは人が読む音をまねて覚えて、何とか声に出して読んでいた。順子さんは「ゆっくり教えれば分かるようになるけれど、通常学級ではそれが難しい」と話す。

近隣の愛知県豊山町に住む六年生の松村天斗君(三)は塾に來るなり、持参した漫画を読みふける。しばらくすると、本を閉じ「さあ、やろう」と漢字の宿題を始めた。分からない字があると、辞書で確かめる。

初めて塾に來た四年生の時は、根気がなく、切れやすかった。宿題がちよつと分からなくなると、パニックに。俊彦さんまでこずったが「深刻

になることはない。無理にやらなくてもいい」と言い続けた。

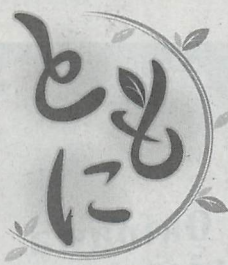
文庫の漫画は読みたいだけ読ませ、眠い時は寝かせ、絵本や子ども新聞と一緒に読んだ。そのうち、俊彦さんにおんぶや抱っこをせがむようになった。俊彦さんは「氷がとけるようにやわらかくなった」と話す。

天斗君は「最初はここに來るのが面倒くさかった。でも、好きな時に本を読み、宿題ができるのがいい。勉強がちよつと好きになった」とはにかむ。順子さんは「夫と人間関係が築けたのがよかった。安心できる環境ができれば、子どもは勉強や読書もする。何となく分かっていたことが実感できた」と言う。

勉強に集中する天斗君に万葉さんがちよつかいを出して追いかけて合ったり、いすや敷物を使って「基地」を作り、そこで本を読んだり。たびたび宿題は中断するが、伊藤さん夫婦はあせらない。「この子たちが楽しい顔をしていれば、育っているかなって思つ」

ゆっくり自分のペースで

息子の死 胸に抱え開塾



近所の道を歩けば康祐さんと歩いたことを思い出し、暗くなった帰り道では、康祐さんが迎えに来てくれた日のことがよみがえった。順子さんは「康祐がどこにでもいる。子どものころ通っていた小中学校にも行けなくなった。亡くなって一年は地獄に落とされたようだった」と振り返る。

康祐さんの死から半年後、愛読した絵本や小説など二万冊をそろえた「家庭文庫えほんのもり」を所有するアパートの一角に整え、地元の人たちに開放。生前に康祐さんとも相談していた構想を形にした。

しかし、周囲の人たちを心配させまいと、元気になったように取り繕うことに心は疲弊していった。康祐さんとの思い出があふれる地元を離れたいと思い、家族三人で毎年夏に旅したイタリアに住む計画を立てた。県職員の定年退

詰め込まない学習塾

主宰する児童文学研究者の伊藤順子さん(五七)と夫俊彦さん(六六)がこの塾を始めたのは、二人が笑みも、笑う気力も失った時期を経てからのこと。二〇〇九年三月、名古屋大三年だった長男康祐さんが二十一歳で急逝した。持病もなく、死因は分からなかった。



出版した絵本を読み「子どもの目線で読んでもらえる絵本にしたかった」と話す伊藤順子さん(右)と俊彦さん＝愛知県岩倉市で

一二年秋、夫妻は悲しみから逃げるようにイタリアのペルージャ外国人入大に入学。大前のアパートを借り、授業の合間には、中世の城塞都市の面影が残る街並みを巡った。「私たちは、言葉の弱いただの初老の外国人。周りが私たちを知らず、開放感があった」

現地ですぐ友人らと交流する中で「gioia(ジョイア)」という言葉を知った。「喜びのシャワーをいっぱい浴びて生きるという意味。子どもの時のように喜びに満ちて、いきいき生きることとを、大人になって経験した。悲しみに包まれている時、喜びに出会い、生きていくてよかったと思ふことが多くあった」と順子さんは振り返る。

塾を開いたのは、帰国した一五年秋のこと。通ってくる三人とも、学校生活に難しさを抱え、勉強や他人への拒否感も強かったが、彼らのやることを見守った。三人は宿題の合間に、カーテンにくるま

って「ミノムシ」になったり、消しゴムのかすを集めて作った「練り消し」を薄くのばし、型抜きして遊んだり。子どもの発想力を感じること、順子さんと俊彦さんの喜びの一つになった。

順子さんが今夏、初めて出版した絵本「しっぽがわらう」(三五館シンシャ)も二十年ほど前、たまたま見た子どもの絵が原点だ。ゾウの顔が描かれた画用紙を裏返すと、ちよろんとしたしっぽがあった。「紙の厚さは一ミリもないけれど、ゾウの胴体は子どもの想像の中にある」

子どもと喜びを追求

(出口有紀)

よりよく生きる土台を



朝からどんよりした十月中旬のある日。天気引っぱるれるかのよう、塾に来た子どもたちも皆、気分が乗らない。来るなり寝てしまったり、漫画を読みふけったり。学習障害(LD)がある子どもが、自ら学ぶ力を身に付けてる愛知県岩倉市の「元気のてる学習塾」では、こんなときも主宰する児童文学研究者の伊藤順子さん(五)と夫の俊彦さん(六)は「ここで安心して寝られるのな。子どもも学校や家で疲れて大変だから」と気にしない。

詰め込まない学習塾

勉強するよう働きかけることもなく、二人は子どもたちを見守る。しばしば宿題をやりかけのまま漫画を読んでいた同県豊山町の六年生松村天斗君(三)は、意を決したように再び机に向かった。やり終えた宿題を天斗君自身で丸付けすると、全問正解。順子さんは「新しい漫画読む？」と笑い掛けた。二〇〇九年三月、二十一歳で急逝した長男康祐さんが生前、注文していたものが死後に届いた。長い間、読めずに置いていたが「天斗が頑張ったごほうび」と、真新しい漫画本を手渡した。

迎えに来た天斗君の母早苗さん(四)も、集中して物事に取り組めるようになった息子に目を細める。塾に来た二年半前は「学校でも気が乗らない行事だと、感情を表に出して参加せず、授業中も魂が抜けたようにぐでーとして、やる気のない態度だった」と言っ。得意なことを見つけよう

うと、いろいろな習い事をさせたが続かなかった。

塾には知人の紹介で天斗君が四年生の時に通い始めたが、早苗さんは塾でも怒ってばかり。そんなころ、順子さんにアドバイスされたのは、



伊藤順子さん(右)が見守る中、母早苗さん(左)の背に乗って甘える天斗君＝愛知県岩倉市で

子のため親も変わろう

息子への接し方ではなく夫との向き合い方だった。「あなたが変わらないと、ご主人も変わらない。夫婦関係がよくなれば、天斗君も自然によくなる」と言われた。しかし、そのときは「うそだあ」と思ったという。

当時、早苗さんは再就職を考えていたが、夫(四)も早苗さんに家にいて家庭を支えてほしいと望んでいた。考えが折り合わないまま、家事や育児のすべてを早苗さんが抱え込んでいた。

順子さんの話を半信半疑に聞きつつも、自分が何に悩み、どうしたいのかを一つずつ夫に話した。早苗さんの話に納得し賛同した夫は天斗君に勉強を教え、家事を手伝ってくれるようになった。「その一面を初めて見て『預けていいんだ』と気楽になった」と話す。

すると、天斗君もゆっくり変わっていった。勉強を教わっている途中で、かんしゃくを起こすことがなくなり、自

分の判断で宿題もやり切れる。早苗さんは「私は『やることをやっから、好きなことをして』と言ってしまっがここは逆。子どもより、私がここに来たかったのかもしれない」と話す。

迎えにきた早苗さんに氣付いた天斗君は、すぐにその背中に乗る。「塾に来るようになる前は、お母ちゃんが『家事で疲れた』って言うから、おんぶしてって言えなかった。でも、今は違う。中学を卒業するまで乗っけて」と甘える。

順子さんは「親も困難や不安がある。でも、その中でどう生きるかを自身に問わないと、子どもとの関係はよくならない」と話す。自身も、康祐さんを思うと「お母さんは、どう生きるの？」と問いかけられている気がする。

「いつも康祐が氣付かせてくれる。子どもたちの人生は長い。勉強以外にも関心を持ち、本を読んだり、調べたり、いろんな人と雑談したりして、よりよく生きるための土台をつくってほしい」